

成果報告書

記入日

2024年4月4日

フリガナ(ネギシ ハナコ) 氏名 根岸 花子	渡航先国名・地域 大韓民国・ソウル	所属機関 西江大学校史学科
研究テーマ：解放前後ソウルにおけるハンセン病患者の統制政策		
研究期間：2024年2月～2024年3月(1年1ヶ月)		
研究成果(概要) ①講義受講を通じた韓国の視点からの韓国近代史・韓国女性史理解②友人らとの交流を通じた韓国文化理解③ソウルの各図書館、デジタル上での書籍閲覧・資料収集④ソウルや地方のフィールドワークを通じた歴史・文化理解		
研究成果(詳細) 【はじめに】 今回松下幸之助記念志財団の日本人留学助成で支援をいただいた留学による成果として、4つを挙げたいと思う。1つめは西江大学校での講義受講を通じた韓国の視点からの韓国近代史・韓国女性史理解、2つめは友人らとの交流を通じた韓国文化理解、3つめはソウルの各図書館、デジタル上での書籍閲覧・資料収集、4つめはソウルや地方のフィールドワークを通じた歴史・文化理解である。 【西江大学校での講義受講を通じた韓国の視点からの韓国近現代史・韓国女性史理解】 西江大学校では、2学期に韓国近代史、韓国女性史、韓国社会学、朝鮮半島統一学の授業を受講した。その中でも特に印象深く、勉強になったのは韓国近代史と韓国女性史の授業だ。どちらも少人数のゼミ形式の授業で、先生の講義と学生らとの議論で授業が進行した。前者では、韓国で執筆された論文や本を読み、内容について議論することが中心に行われたが、ここでは論文の読解力がついたことはもちろん、韓国人学生と議論をすることができ、とても有意義だった。日本の植民地支配の歴史について、日本と韓国では歴史事実の理解に対する土台が全く異なるために、議論できる場は非常に限られている。その中でこの留学を通し議論をすることができ、歴史的事実の理解だけでなく韓国側の理解や意見、見解を学ぶことができた。日本社会において現在にも続く植民地主義と歴史問題の継続について再度自分がやるべきことについて考えさせられた。また自身の研究についての発表を行う機会があり、そこでは先生や学生からアドバイスをもらい、非常に貴重な経験だった。 後者の授業では、主に韓国における女性史・ジェンダー史の発展過程と韓国におけるジェンダー平等のための運動の発展について学ぶことができた。韓国でも日本と同様にジェンダー不平等が深刻なことで、また学生との議論を通し女性として抑圧されている経験があることが分かった一方で、友人などの周囲の人々との経験の共有や社会の問題点に関する議論に関しては日本より韓国において行いやすい雰囲気があることも感じられた。特に大学生の間でジェンダー平等に対する問題意識があり、議論できる環境があるということである。この授業を通して、自分が女性史・ジェンダー史を研究する意義を感じたとともに、日本においてもジェンダーの問題や女性の人権の問題に		

ついて気軽に話することができる場をつくることの必要性を強く感じられた。

【友人らとの交流を通じた韓国文化理解】

留学中は友人に恵まれ、おかげで言語の勉強だけでなく様々な経験をすることができた。韓国では基本的に1人で行動する文化があまりなく、レストランに1で行ったり、各種体験などを1で行ったりすることが基本的にできない。その意味で、友人らとともに様々な場所に行き、レストランや食堂で食文化を楽しんだり、工房で制作体験をしたりするなど非常に貴重な経験をすることができた。

【ソウルの各図書館、デジタル上での書籍閲覧・資料収集】

ソウルには中央図書館や国家記録院、大学の図書館、博物館などが集中しているため、留学中は韓国でしか入手・閲覧することができない資料の収集を行った。韓国の多くの歴史史料はデジタル化がなされているものの、図書館に直接行かなければ閲覧できないものや韓国の大学の学籍がないと閲覧できないものが多いため、この機会に閲覧することを目標とした。主に訪問したのは西江大学校図書館、国立中央図書館、延世大図書館である。私が留学していた西江大学校に所蔵がない史料に関して学部生は他大学からの取り寄せサービスを利用できないため、直接訪問するか他大学に通っている友人に頼み、入手するなどした。閲覧・収集作業の成果として挙げられるのは以下の2つである。一つは韓国で出版された研究書の閲覧である。研究書に関してはほとんどがデジタル化されておらず、また日本の図書館に所蔵がないものが多く日本で閲覧できないため成果と言える。

二つ目は植民地期に官憲から発行された医療・衛生関係史料やソウル(京城)や大邱における工場衛生史料の閲覧である。どちらも日本で閲覧することができないため、大きな成果となった。史料の内容は今後精査し研究に活用することが必要とされるが、植民地期朝鮮において女性がいかなる医療・衛生したのかについて研究するうえで重要な史料を閲覧することができたと感じる。一方で、研究テーマであるハンセン病に関しては、当時の医療技術的限界の存在と政策的優先順位が決して高いとは言えなかったと思われることから、植民地期のソウルにおける特に「ハンセン病」に絞った史料がほとんど存在せず、研究テーマをより広く設定する必要があることが分かった。

【フィールドワーク・旅行を通じた歴史・文化理解】

留学中には、ソウルだけでなく韓国国内の様々な場所に行き、フィールドワークや旅行を行った。具体的には、釜山(2回)、済州島(2回)、仁川(3回)、全州、群山、江陵、原州、坡州、順天、小鹿島、天安、水原などである。個人的な調査・旅行のほか、日本の大学のゼミで行った調査や韓国の大学の調査、市民団体のツアーに参加した。

その中でも、特に印象深かったのは2024年3月11日~12日に実施した全羅南道小鹿島の調査と23年9月20~23日、全羅北道の群山・全州において実施した調査である。

全羅南道小鹿島では、植民地期に日本が設置したハンセン病患者収容所の跡地を調査した。今回の留学で研究テーマに直接かわる場所であり、私が一番訪問・調査を行いたかった小鹿島は、現在も回復者の方々(ほとんどが高齢者)が居住し、病院も設置されていることから新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響で2023年2月まで外部者の立ち入りが禁止されていた。立ち入り禁止解除後、訪問した小鹿島は立ち入れない区域があったり、島民の方々からお話を聞くことができないなど制限もあったが、非常に意義深い調査となった。朝鮮半島では、日本による支配の中で劣悪な環境下に置かれた人々のあいだでハンセン病を発症する人が多くいたが、それに対し日本は「患者の収容は形だけで良い」という当局の役人の言葉通り、小鹿島に収容所が設置されたものの患者のごく一部を収容するものに過ぎなかった。一方で収容所に強制的に送られた患者らは日本式の服や生活様式を強制された。そのような日本当局による強権的なハンセン病政策は特効薬が発見された解放後も残り、患者らの人権は侵害された。

現在も小鹿島には、植民地期に日本によって建てられた収容所の建物が多く存在する。調査では、それらの建物

の見学と島内の博物館の見学を中心に行った。その中でも、日本の植民地支配とハンセン病患者収容政策の暴力性を表す建物が「検屍室」だ。ここでは、亡くなった患者の解剖が本人や遺族の同意なしに行われたほか、規則に反したり「反日」的だと判断された患者の去勢手術が行われたという。日本のハンセン病療養所でも去勢手術が行われたものの、罰則としての手術は行われなかったことから、ここに植民地としての暴力をみることができるといえる。朝鮮では、被支配者である「朝鮮人」であり「ハンセン病患者」である人々は二重の差別・抑圧を受けたといえる。現在も残る検屍室の建物は、冷たく、がらんとし、怖い雰囲気を感じた。現地調査を通し植民地支配の暴力性をまざまざと感じた。



全羅北道群山・全州では植民地期の遊郭跡地、現在の反性売買女性運動についてフィールドワーク、インタビューを通した調査を行った。そもそも、植民地期の全羅北道は群山を中心としてコメの生産が盛んにおこなわれた。朝鮮人によって生産されたコメは日本に移出され、「収奪」の歴史として記憶されている。コメが多く収穫できるこの地には、日本人が進出し特に群山に居住し、国家による性売買管理制度である遊郭が導入され、栄えたという。

こうして朝鮮半島に持ち込まれた遊郭制度は、解放後に性売買制度として受け継がれることとなった。韓国の女性(特に貧困層)は外貨を稼ぐためのモノとされ、性売買を行った。群山には米軍基地が設置されたため特に米軍男性が買春者であった。群山を中心とした全羅北道地域における性売買制度は、主な買春者が韓国人男性となった現在にも継続する一方で、性売買制度は女性からの性搾取であり、女性の人権保護、性平等という面から性売買に反対する運動が行われている。運動が活発になったきっかけは2000年代初頭に2度続けて性売買集結地での火事により計20人以上の性売買女性が亡くなった事件の発生だった。オーナーにより外側から鍵がかけられ軟禁状態にあった女性たちは、火事が発生しても外に逃げることができず、亡くなったのである。このように反性売買女性運動は性売買の現場で犠牲になった女性たちの存在の上に始まった。

群山では、2000年代初頭に起きた火事の現場の調査、犠牲になった女性たちの追悼式典に参加した。式典は亡くなった女性に宛てた手紙の朗読、追悼の歌、性売買女性の処罰規定が存在する現行の法律の改正を求める掛け声、献花、歌の合唱、のう流れて進行した。「追悼式」と聞くと緊張感の漂う、厳かで暗いイメージがあったが、この式典では亡くなった女性たちを追悼し、記憶したうえで空の上で自由に暮らしていけるように願う、どこか明るい雰囲気があった。とくに最後の書道のパフォーマンスは性売買、性搾取のない性平等が実現された社会のために全員が楽しく参加できるもので、日本での運動でも取り入れなければいけないものだと感じた。



留学中の生活・研究でのトピックス

留学中は、前半は主に大学付属の語学学校に通学し、主に朝鮮語のスピーキング能力を伸ばすことに力を入れた。語学学校では、友達に恵まれ日常的に朝鮮語で話す環境があり、非常に良い経験だった。また、語学学校以外でもサークル活動や言語交換活動を通じて韓国人の友達にも恵まれ、留學生活の後半にはその友達らとシェアハウスすることになるなど、ネイティブスピーカーのアドバイスをもらいつつ日常的に朝鮮語会話を行える貴重な経験をすることができた。

留學生活後半には、大学の授業を4つ履修し、韓国近代史や韓国女性史、社会学、朝鮮半島政治史など幅広い分野の勉強をすることができた。韓国人の学生との議論を通して意見を聞くことができたのは意味のあることだったと思う。

また、大学では2つのサークルに所属して活動を行った。1つめは日本軍「慰安婦」問題(日本軍性奴隷制問題)解決のための大学生サークル「平和ナビ」で、週に1度の勉強会を行ったり、日本大使館前での集会(水曜集会/水曜デモ)に参加したり、大学でのキャンペーンを行ったりした。日本大使館前での集会は、1992年から30年以上、毎週水曜日に行われているもので日本軍性奴隷制問題の真相解明、日本政府の責任履行、賠償、そして被害者の名誉と人権の回復を求められているものだ。日本で「集会」や「デモ」というと「怖い」「過激」というようなイメージがあると思われるが、水曜集会に関わらず韓国の集会ではダンスや歌などが中心に行われ、参加したい人は気軽に参加でき、かつ問題を周囲に親しみのある雰囲気で見せるものだった。日本では歴史を顧みず「反日」と切り捨てられるこの集会や日本軍性奴隷制問題、そしてその被害者の存在を忘れずに、真に人権が尊重される社会に向けて自分が行動しなければいけないと考えさせられる経験だった。

2つめは西江大学のキャンパス内にいる猫のお世話・保護をするサークル「ソコモ」だ。週1回、当番制で大学内にいる猫にご飯をあげたり薬を飲ませたりした。さらに人間と猫の共生のためには必要不可欠なものであるTNR(野良猫に避妊・去勢手術をし、元居た場所にかえすこと)活動も行った。さらに病気になった猫や弱っている猫の一時保護活動も行った。

留學生活を通して、平日には授業を受け、勉強したりサークルで活動を行ったりし、週末には友人と遊びに出かける生活だったが、勉強だけでなく文化という面でも様々な経験をすることができたと思う。留學生活と並行して、一橋大学社会学部で所属しているゼミの活動でソウルのガイドブックの制作・出版も行った。留學先の授業と並行し執筆のための調査と執筆、さらに編集という作業をこなすのは簡単ではなかったが、ソウルで生活をしながら歴史を学び、それをアウトプットするという作業を行うことで、自分自身勉強になることが多かった。出版したガイドブックは、韓国カルチャーに関心を持ち、韓国へ観光に行く人が増えている現在、観光やエンタメを入り口に歴史を学ぶことができる今までにないガイドブックとなり、非常に意義のあるものを制作できたと感じる。

今後の社会貢献

留学を終えて、今後の社会貢献活動として、以下の2つを中心に行っていこうと思う。第一に日本においてジェンダーの問題や女性の人権の問題について若者が安心して語り合うことができる場を作ることである。上記の通り、留学中の講義受講やサークル活動を通して韓国では日本と異なり若者の間でジェンダーの問題や女性の人権の問題について語るができる雰囲気、場があると感じた。加えて、日本とは異なり差別的な発言や誰かを抑圧し得る発言はしない、という基本的な共通理解が確立されていることに気づき、日本でもそのような場を作ることの必要性を感じさせられた。そこで留学終了前から大学の垣根を超えてジェンダーの問題や女性の人権の問題について安心して語り合うことができるサークルの設立をはじめ、2024年度4月から本格的に活動をしていきたいと思う。運動団体などではなく、大学のサークルという形をとることである種気軽に、「ジェンダーの問題を学びたいけどどうすればいいのかわからない」人や「普段女性として抑圧されているように感じるけど誰とも話せない」ような人とともにともに問題を考え、ジェンダー平等が実現された社会をつくるために少しでも寄与したい。

第二に「日韓」の歴史問題について共に考える仲間を増やしていく活動である。日本では「日韓」の歴史問題は政治・外交問題としてみなされ、そこで韓国は「いつまでも騒いでいる」「反日」だとして切り捨てられる。そうではなく、歴史問題を人権問題として考え、真の解決のために歴史を学び、差別がなく、誰もが人権を尊重される社会の創造へ寄与していきたい。「日韓」の歴史は両国間関係のみに関係するものでなく日本社会における植民地主義・排外主義の問題、ひいては在日コリアンをはじめとした在日外国人への差別の問題につながるものである。人々がお互いを尊重し、共存する日本社会を作っていきたい。

最後に、私は留学を通して非常に多くの学びを得ることができたが、それは松下幸之助記念志財団の助成、また家族の支援がなければ実現しなかったことである。奨学金申請の段階から採用、さらに留学中も学生を気にかけていただいた松下幸之助記念志財団の谷口さんをはじめ、家族など留学を支援してくださったすべての方に御礼申し上げます。また、留学を応援し、費用の一部を支援してくれた祖父母は留学中に相次いで亡くなり、その最期に間に合わなかった。後悔は残るが今後留学で得た学びをもとに社会に貢献していくことで、恩返しとしていきたい。